

江の島のインバウンド観光と外国人観光客の観光行動

鈴木雅人¹・西出泰知¹・細江美紀¹・新林智典²

(¹愛知教育大学・学, ²愛知教育大学・院)

I はじめに	IV おわりに
II 対象地域の概観	
III 外国人観光客の観光行動	

キーワード：インバウンド観光, 外国人観光客, 観光行動, 江の島, 神奈川県藤沢市

I はじめに

1. 研究の背景

島国という条件をもつ日本は、外国には類を見ない、独特に発達した文化や歴史的景観で人々を魅了する。また、四季折々がみせる自然景観も相まって、日本は観光で訪れたい国として外国人観光客にも大きな支持を得ている。たとえばアメリカの旅行雑誌『Travel + Leisure』によると、「世界の観光都市ランキング（ワールド・ベスト・アワードのシティ部門）」において京都市が2014年から2年連続の第1位を獲得し、2016年でも第6位にランクインしている¹⁾。

2000年代以降、日本政府は「観光立国」を目指す立場を明確にし、2003年の小泉政権（当時）において、訪日外国人旅行客数を2010年までに1,000万人へと倍増することを目指すべく「観光立国懇談会」を発足

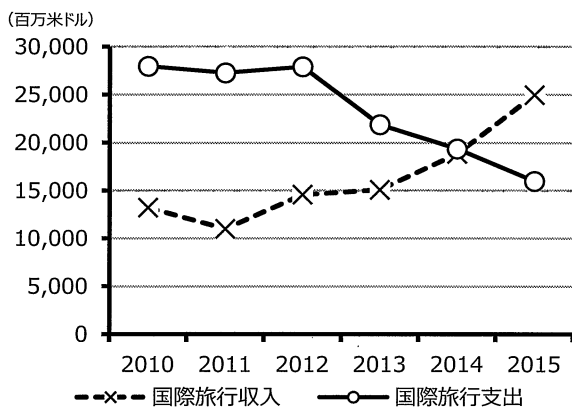


図1 日本における国際旅行収支の推移

(日本政府観光局 (JINTO) ホームページより作成)

させた(貞清 2008; 鈴木 2008)。その後、「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を含む様々な観光政策が実施され、2008年には国土交通省の外局に「観光庁」が設立されるなどポジティブな作用が働いた。その結果、2013年には訪日外国人旅行客数が当初目標の1,000万人に達したのである²⁾。こうした数字の上昇に、京都市のような世界的誘引力をもった観光都市が一躍買ったことは、想像に難くない。

しかしながら、上記のように国際観光業は日本の特筆すべき長所として様々な利益が期待されるにもかかわらず、日本の国際旅行収入は2015年時点で250億米ドルであり、GDPの1%も満たしていない。ただし、国際旅行支出が低下する一方、国際旅行収入は2011年から年々増加しつづけ、2015年には収支が逆転した(図1)。このことから、日本国内の国際観光業界にはまだまだ発展の余地があるといえる³⁾。それゆえ、今後の訪日外国人観光客の増加を見越して、個別具体的な都市や地域におけるインバウンド観光の特性を把握しておくことには一定の意義があろう。

そこで本研究では、日本の数ある魅力的な観光都市のなかから、古くは江戸時代から関東一円の観光都市としてその地位を確立し、近年は訪日外国人観光客の誘致と受け入れ環境の整備を進める神奈川県藤沢市⁴⁾の「江の島」に焦点をあて、外国人観光客のミクロな観光行動とその特性を明らかにしたい。

2. 先行研究と研究目的

江の島やその周辺地域には、江ノ島電鉄(江ノ電)や新江の島水族館など施設型観光資源が豊富にあるこ

とから、従来観光学や建築学からの研究蓄積が多くみられる。たとえば、江島神社や地域社会と宗教観光との関係、特に景観の変容について考察した森 (2007, 2009) や、江の島の地域活性化のために観光客と地域住民が互いに利用できるような施設設計の必要性を指摘した小土井 (2013) などがあげられる。

一方で、本研究が着目する江の島のインバウンド観光や、外国人観光客の観光行動を扱った研究は管見の限り見当たらない。また、藤沢市は外国人観光客数について市全体での統計を出しているが⁵⁾、外国人観光客の属性に関連した詳細なデータの公開や江の島での観光行動に関する記述はみられない。観光地理学地理学の観点からは、中岡 (2012) によって江の島が南関東からの日帰り集客圏を有することは明らかにされたものの、これはインバウンド観光に触れた研究ではない。そこで本研究では、江の島に訪れた外国人観光客を対象に観光行動調査を行うことで、藤沢市のインバウンド観光発展の一助としたい。

なお江の島以外の事例では、トルコにおける外国人観光客の観光行動に着目した若林 (2002) が、主とする行動ごとに観光客をグループ分けし、アンケート調査によって各グループの観光行動の差異を分析している。また有馬ほか (2014) は、箱根湯本における外国人観光客の土産物購買行動の差異を、行動動線 (徒歩) によって明らかにした。これら先行研究を踏まえ、本研究では調査実施期間の短さを考慮し、若林 (2002) にならって街頭でのアンケート調査を行った。

II 対象地域の概観

1. 江の島の概観

本研究の対象地域である「江の島」は、神奈川県藤沢市に位置している (図2, 図3)。江の島は、陸地側とは砂州 (トンボロ) によってつながった、典型的な陸繋島である。住所は藤沢市江の島1丁目ならびに2丁目に該当し、面積は約0.42km²で周囲の長さは約3km、最高地点で海拔60.4mとなっている (表1)。江の島は度重なる地震によって形成された隆起地形をもち、特に島西部には長年の波の侵食作用による離水波食崖や波食台が存在する (なお島東部は人工埋め立て地となっており、原地形はほとんど残っていない) (松田ほか2015)。『平成27年国勢調査』によれば、島の人口は157世帯で368人しかおらず人口減少が進んでいる。江の島が属する神奈川県藤沢市は相模湾に開かれた湘南海岸を擁し、遠くに富士山を望んで年間1,800

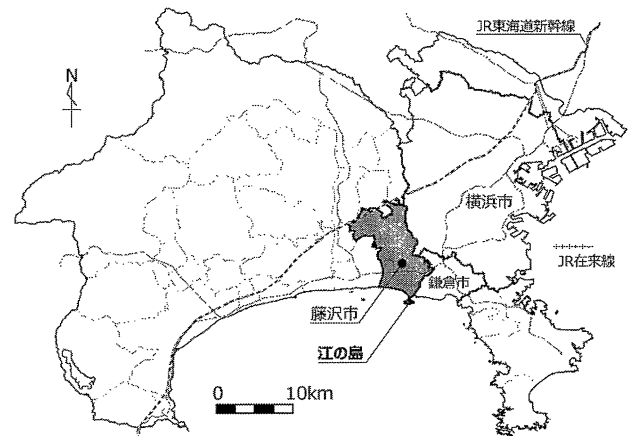


図2 江の島 (神奈川県藤沢市) の位置



図3 江の島の景観

(江の島弁天橋にて。2017年3月8日、阿部亮吾氏撮影)

万人を超える観光客が訪れる観光都市である。特に、藤沢市は「東洋のマイアミビーチ」と謳われる美しい海岸線によって、多くのマリンスポーツを楽しむ人で賑わっている⁶⁾。本研究の調査時 (2017年3月7~8日) においても、江の島入口の片瀬海岸は天候が悪く肌寒いにもかかわらず、朝早くからウェットスーツを身にまとったサーファーで溢れ、本物の『湘南』を感じさせた。毎年7月1日には海開きが行われ、約2か月のあいだに、西側の辻堂海岸を含めおよそ240万

表1 江の島の概観

住所	江の島1丁目, 2丁目
面積 *1	約0.42km ²
周囲の長さ (海岸線) *2	約3km
最高標高 *2	海拔60.4m
人口 (世帯数) *3	368人 (157世帯)

注: *1『平成22年国勢調査』(小地域統計), *2 神奈川県生命の星・地球博物館ホームページ「自然科学のとびら6-3」(2000年), *3『平成27年国勢調査』(小地域統計)

(各種統計等より作成)

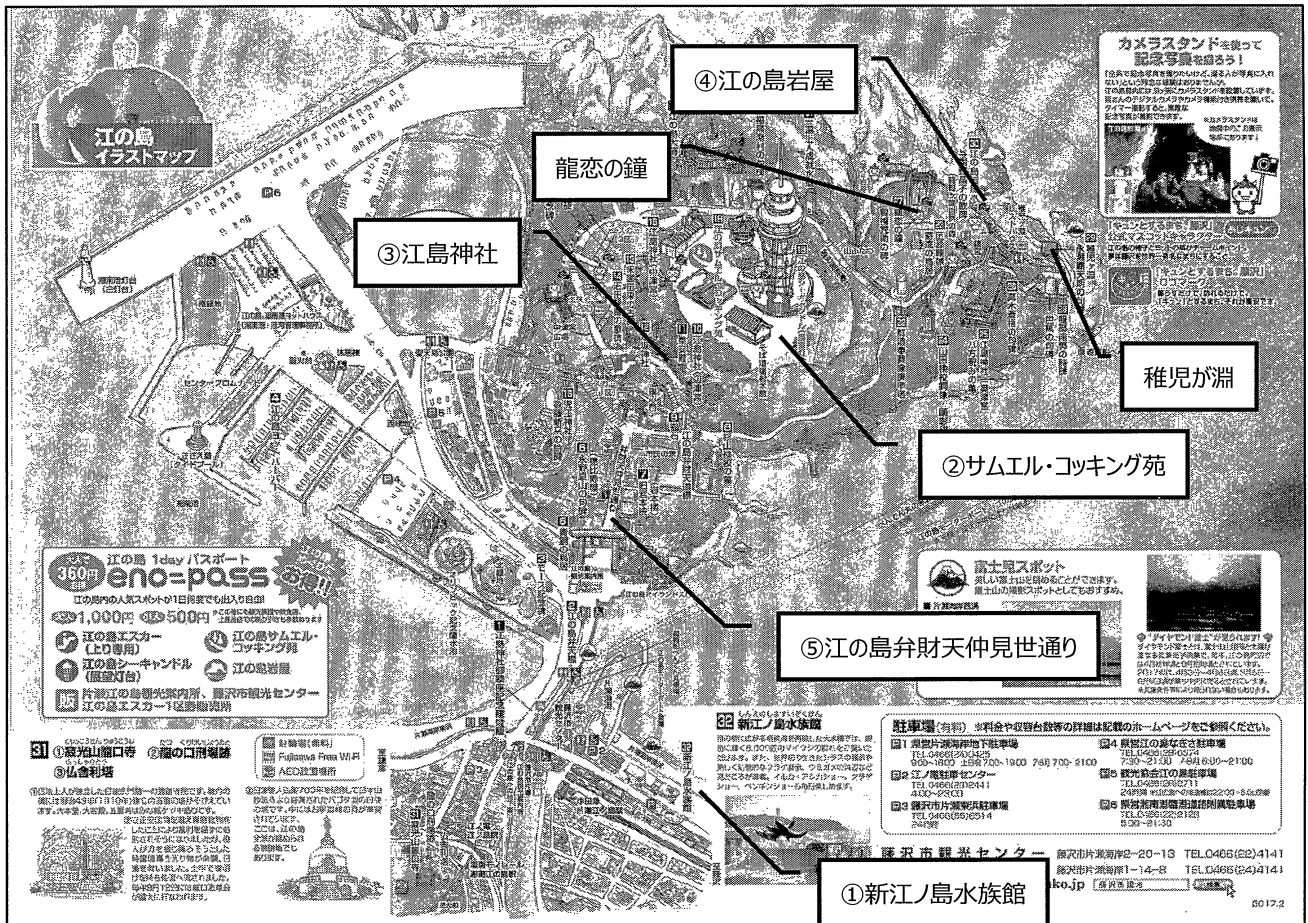


図4 江の島イラストマップ

(公益財団法人・藤沢市観光協会ホームページより転載して筆者ら一部加工)

人の海水浴客が訪れる⁷⁾。また、年間を通じてイベントや伝統行事も数多く行われており、観光都市としての一側面を垣間見ることができる。東海道五十三次の宿場町（藤沢宿）として栄えた歴史ある町並みに加えて、最先端のショッピングスポットもあり、藤沢市は近隣都市の鎌倉市に勝るとも劣らない観光都市といえよう。なかでも古くから参詣・遊山の地としてにぎわってきた江の島は、日本有数の人気エリアとなって多くの観光客を誘引している。

2. 江の島内の主要観光スポット

本研究でアンケート調査の対象地域となった江の島の主要観光スポットについて、図4のイラストマップ等を参考に、以下で簡単に触れておきたい。ここでは、江の島の主な観光スポットを①新江ノ島水族館（厳密には島外に立地しているが、図4の江の島イラストマップにも掲載されているので取り上げた）、②サムエル・コッキング苑、③江島神社、④江の島岩屋、⑤江の島弁財天仲見世通りとした。その他、アンケート調査票には「龍恋の鐘」や「稚児が淵」も選択肢に用

意した。

①新江ノ島水族館

江の島島外の片瀬海岸沿いに立地する、海や海洋生物の不思議を発見できる水族館。クラゲファンタジーホールは、他の水族館ではお目にかかれないクラゲを展示しており、3Dプロジェクションマッピングも有名である。当水族館は、2010年放送のフジテレビ系TVドラマ『流れ星』の舞台となった。

②サムエル・コッキング苑（ならびに江の島シーキャンドル展望灯台）⁸⁾

英国出身の貿易商サムエル・コッキングによって1882（明治15）年から造成された庭園の跡地が、2003年4月に「江の島サムエル・コッキング苑」としてリニューアルされた。苑内には国際交流をテーマに藤沢市の姉妹・友好都市コーナーが設けられている庭園があり、南洋植物をはじめ四季折々の花が植えられている。また高さ59.8m、海域119.6mの展望灯台からは南に大島、西に富士山、東に三浦半島を望むこ

とができる。春の花々や夏の海水浴，秋の空に生える夕日や冬のイルミネーションなど，季節ごとにさまざまなイベントが催されている。

③江島神社⁹⁾

日本三大弁財天を奉る江島神社は，田寸津比賣命を祀る「辺津宮」，市寸島比賣命を祀る「中津宮」，多紀理比賣命を祀る「奥津宮」の3社で構成されている。ご祭神は，天照大神（あまてらすおおみかみ）が須佐之男命（すさのおのみこと）との誓約時に生まれた3姉妹の女神である。

この3女神を「江島大神」と称している。古くは江島明神（えのしまみょうじん）と呼ばれていたが，仏教との習合によって弁財天女とされ，江島弁財天として信仰されるに至った。海の神や水の神の他に，幸福・財宝を招いて芸道上達の功德を持つ神として，今日でも信仰の対象となっている。

④江の島岩屋¹⁰⁾

長い歳月を経て波の侵食作用で形成された岩屋は，第一岩屋（奥行き152m）と第二岩屋（奥行き56m）で構成されている。洞内には，歴史的・民俗学的にも大変貴重な文化遺産でもある石造物が神秘的な音響や照明で演出され，江の島の浮世絵や龍神伝説の展示などもある。なお，岩屋は1971年から長らく閉鎖状態にあったが，再整備されて1993年4月に再開された。

⑤江の島弁財天仲見世通り

陸側から江の島弁財天大橋を渡って青銅の鳥居をくぐると，江島神社へとつづく参道には土産店や食事処が並ぶにぎやかな仲見世通りを眺めることができる。本アンケート調査期時にも，多くの外国人観光客が買い物に興じる姿を目視できた。

Ⅲ 外国人観光客の観光行動

江の島を訪れる外国人観光客の特徴をつかむため，本研究では2017年3月7～8日に街頭でのアンケート調査を行った（図5）。なお，アンケート調査は江の島で最も歩行者量の多い江の島入り口から，江島神社に至るまでの参道上に連なる江の島弁財天仲見世通り商店街で行った。なおアンケート調査票は，2013年度に藤沢市が行った調査による国籍別外国人観光客数を参考に，使用言語の多い中国語・英語・韓国語の3か国語を用意した¹¹⁾。調査結果は以下の通りである。



図5 江の島におけるアンケート調査の様子
（江の島入り口にて。2017年3月7日，阿部亮吾氏撮影）

1. 回答者の基本属性

まず，アンケート回答者（総数80人）を国籍別にみると（図6），中国が26人（32.5%）と一番多く，つづいて香港12人（15.0%），台湾10人（12.5%）であった。これら上位3か国・地域だけで，回答者全体の60%を占めていることになる。ヨーロッパ諸国やアメリカからの観光客は国籍別でみるとそれぞれ一人にとどまるが，欧米・中南米・オセアニア合計でみると35%にも及ぶ。一方で，上位3か国・地域以外のアジア（たとえば韓国やタイなど）の観光客は全体の5.0%であり，アンケート調査の回答者としては少なかった。なお男性は36人，女性は44人でやや女性が多かった。以下，本研究では上位3か国・地域にその他アジアを加えた回答者を「アジア圏」，それ以外を「欧米他圏」として行論する。

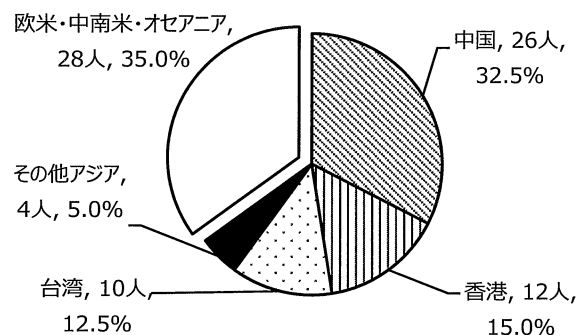


図6 アンケート回答者の国籍
（アンケート調査より作成）

次に回答者を年代別でみると，20代以下は46人（57.5%），30代は17人（21.3%），40代は8人（10.0%），50代以上は9人（11.3%）であった。30代までの回答者が8割近くを占めている。また，同伴者は夫婦・恋

人が12人(15.0%)、家族が34人(42.5%)、友人が33人(41.3%)であり、逆に同伴者なしは6人(7.5%)に過ぎなかった。特に20代は友人と訪日し、4~5人のグループで行動している人が多かった。

2. 訪日回数・滞在日数・旅行費用

回答者の訪日回数に着目してみると(図7)、アジア圏と欧米他圏ではその傾向に大きな差がみられた。すなわち、欧米他圏の回答者はそのほとんどが初来日であったのに対し、アジア圏では初来日者も多い一方で複数回目、とりわけ5回目以上が16人もおり、なかには20代にして12回も日本を訪れたことがある香港出身男性もいた。インバウンド観光におけるアジア圏との距離の近さをうかがえよう。

日本での滞在日数(回答者総数78人)は、1週間程度が40人(51.3%)でもっとも多く、2週間以上が32人(41.0%)であった。1週間程度の滞在と2週間以上とで大きく分かれたのは、日本と近距離にあって滞在日数が短いアジア圏と、遠距離で滞在日数が長い欧米他圏で違いが出たことに関係している。

また、今回の旅行費用(総数76人)は5万円未満が12人(15.8%)、5~10万円が15人(19.7%)、10~20万円が23人(30.3%)となり、一方で20万円以上が26人(34.2%)であった。観光庁のプレスリリース(2017年4月19日付)¹²⁾によると、2017年1-3月

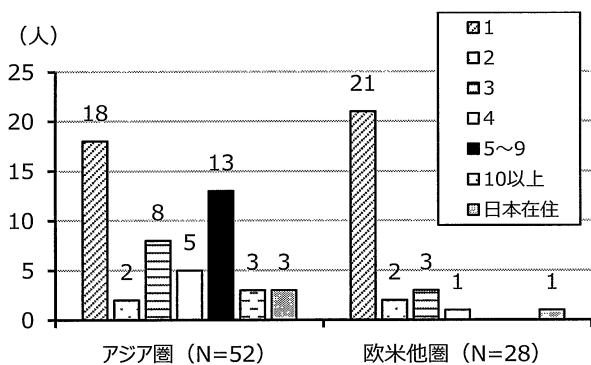


図7 アンケート回答者の訪日回数
(アンケート調査より作成)

期の訪日外国人の平均旅行支出は148,066円であることから、回答者の旅行費用は平均的なものといえる。ただし20万円以上が最多の26人となったのは、欧米他圏からの回答者に影響を受けているものと考えられる。

3. 江の島における観光行動

次に外国人観光客が江の島内で訪れる予定の、もしくはすでに訪れた観光スポットの特徴をみてみたい。表2によると、江島神社の訪問が100.0%であること以外は、サムエル・コッキング苑、江ノ島水族館、岩屋洞窟、龍恋の鐘ともに4~5人に1人の訪問にとどまった。江島神社しか訪れない人は31人(38.8%)にもものぼるが、サムエル・コッキング苑まで訪れる21人のうち、他の島内観光スポットも訪れるのは15人(71.4%)であった。

このような結果になった理由として、江の島は江島神社に至る途上の商店街を歩くだけでもかなり急な坂を上ることになる。そのため、江島神社のさらに奥へ入って階段を上り、最も高い位置にあるサムエル・コッキング苑に至る前に、来た道を引き返してしまう人が多いようであった。また、調査中には日本の商店街の雰囲気と、江島神社の鳥居だけ見て引き返す人の多さも目立った。逆に、サムエル・コッキング苑まで行く人はその先の観光スポットに訪れる可能性も高くなるのではないだろうか。

この観光行動を出身地別にみると、おおむねアジア圏の回答者の方がより多くの観光スポットを訪れているのに対し、唯一サムエル・コッキング苑だけは欧米他圏が上回った。明確な理由は得られないが、英国出身のサムエル・コッキングが欧米他圏とのつながりを感じさせる人物であるからかもしれない。

4. 江の島来訪前後の観光行動

次に、江の島来訪前に訪問してきた観光地と、その後に訪問予定の観光地について複数回答可で尋ねた(図8)。まず、回答者全体(総数74人)では多

表2 江の島内で訪問した(する予定の)観光スポット

観光スポット	サムエル・コッキング苑		江ノ島水族館		江島神社		岩屋洞窟		龍恋の鐘		稚児が淵		その他	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
アジア圏 (N=52)	11	21.2	17	32.7	52	100.0	17	32.7	13	25.0	8	15.4	1	1.9
欧米他圏 (N=28)	10	35.7	3	10.7	28	100.0	5	17.9	5	17.9	1	3.6	1	3.6
計 (N=80)	21	26.3	20	25.0	80	100.0	22	27.5	18	22.5	9	11.3	2	2.5

(アンケート調査より作成)

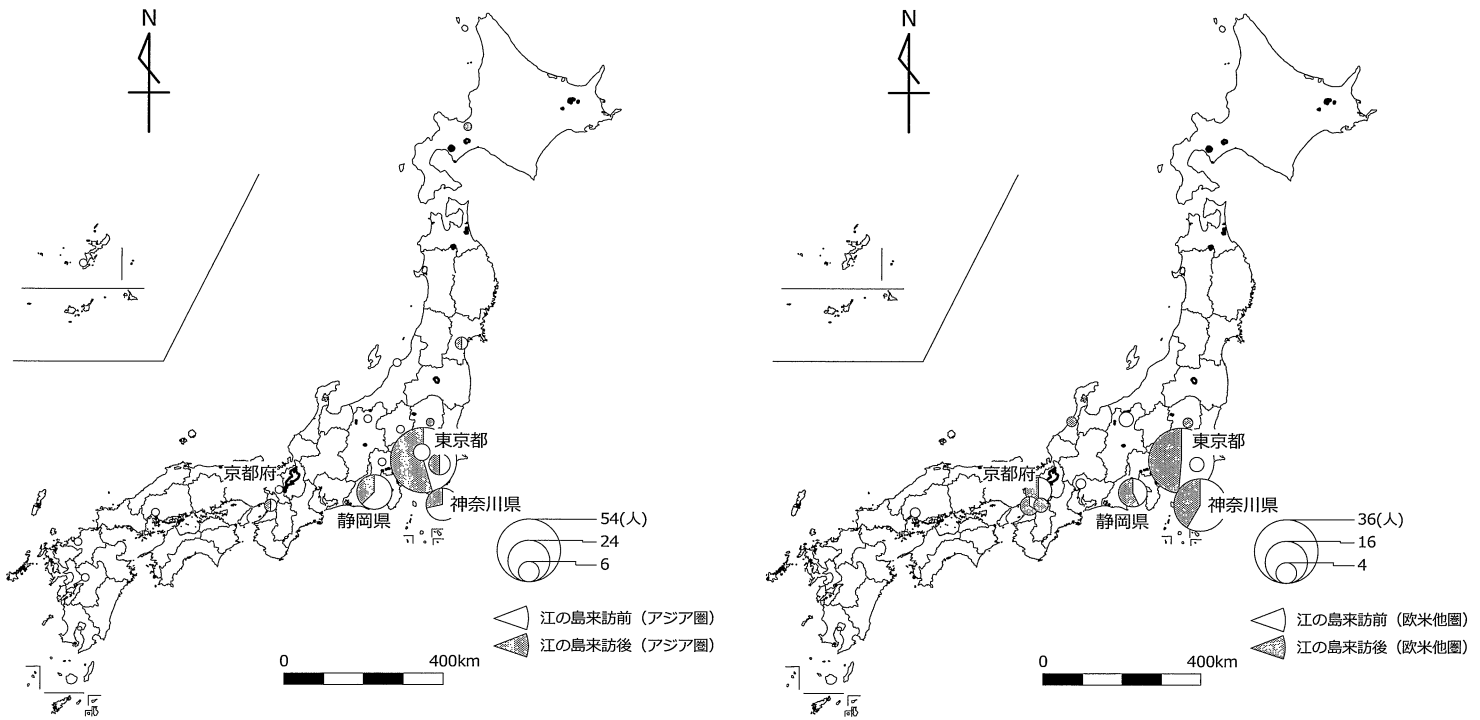


図8 江の島来訪前後の観光ルート
(アンケート調査より作成)

表3 江の島観光で期待すること

江の島に期待すること	食事		旅館に宿泊		自然・景勝地		ショッピング		美術館・博物館	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
アジア圏 (N=52)	20	38.5	5	9.6	44	84.6	12	23.1	5	9.6
欧米他圏 (N=28)	12	42.9	2	7.1	25	89.3	14	50.0	2	7.1
計 (N=80)	32	40.0	7	8.8	69	86.3	26	32.5	7	8.8

(アンケート調査より作成)

い順に東京都 (45 人, 60.8%), 神奈川県 (24 人, 32.4%), 静岡県 (13 人, 17.6%) を経由して江の島に来訪していた。東京 23 区内の場合, 主に新宿や秋葉原等からの訪問である。ディズニーランドのある千葉県浦安市からの移動もあった。神奈川県や東京都といった南関東は, 江の島の日帰り集客圏となっていることがすでに明らかにされており (中岡 2012), また隣接の鎌倉市を經由してからの訪問も多く観光客が用いる一般的なルートである。基本的には外国人観光客もそうした観光行動をとっている様子である。しかし, ここで特徴的なのは静岡県からの来訪者が多い点であろう。これは富士山や箱根, 伊豆を訪問してからの江の島来訪ということであった。そして江の島を訪問した後 (総数 69 人) は, 東京都に行く人が 49 人 (71.0%), 神奈川県が 14 人 (20.3%), 静岡県が 10 人 (14.5%) であった。

これをアジア圏と欧米他圏に分けてみると, アジア

圏の方が静岡県側から江の島に入ってくる人の割合がやや高く, その後は東京方面へと抜けている。一方の欧米他圏は, どちらかといえば東京方面から江の島に入ったのち, 静岡県や関西方面 (京都府, 大阪府, 奈良県) に向かって見受けられる。いずれにしても, 神奈川県内他所からの移動は多かった。

以上のことから, 江の島に来訪する外国人観光客は江の島を含めた神奈川県内や静岡県の観光地を訪れてから東京都へと向かうルートを選択する人がやや多いものの, 前後の観光行動は双方向的であることが分かった。ただし, その観光行動にはアジア圏と欧米他圏でやや逆方向に向かう違いがあることも示唆された。

5. 江の島観光で期待すること

最後に, 江ノ島観光で期待していることを調査した (表3)。アンケート調査票では食事, 旅館に宿泊, 自然・景勝地, ショッピング, 美術館・博物館という 5 項目

で複数回答可とした。表 3 によるとアジア圏、欧米他圏で回答傾向に著しい差はみられない。いずれも江の島の自然・景勝地には多くの人が期待を寄せている。1 点だけ指摘するとすれば、ショッピングに期待している人の割合は欧米他圏でより高かった。実際に、調査中でも「ハローキティ」専門店で購入する外国人観光客のほとんどが欧米人であるとうかがった。日本との距離が遠い欧米他圏からの観光客ほど、日本文化を感じさせる商品やお土産を、積極的に求めているのではないかと推察される。

IV おわりに

本研究では、江の島におけるインバウンド観光に焦点をあて、外国人観光客の観光行動に関するアンケート調査を行った。その結果、観光行動では江島神社に参詣することが江の島観光の主目的になっていたが、その行動範囲はアジア圏の方が欧米他圏よりもやや広がったこと、江の島来訪前後では主に東京都・神奈川県方面と静岡県方面からのルートが双方向的に利用されていたこと、そして欧米他圏の観光客は自然・景勝地に加えて江の島のショッピングにも期待をもっていることなどが明らかとなった。

一方、本研究ではアンケートの調査場所を確保することに苦労したため、江の島に入るすべての外国人観光客に対してアンケート調査を行うことができず、外国人観光客の全体像をつかむことができなかつた。また調査期間が短かつたため、季節による観光行動の変化を知ることができないという課題も残った。いずれも今後の研究に期待したい。

謝 辞

本研究のアンケート調査では、観光中にもかかわらず、江の島を訪れる外国人観光客の方々にご協力いただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 日本政府観光局 (JINTO) ホームページ (<http://www.jnto.go.jp/jpn/index.html>) (最終閲覧日:2017年6月14日) の「報道発表資料 (2015年7月8日付)」,ならびに『Travel+Leisure』ホームページ (<http://www.travelandleisure.com/>) (最終閲覧日:2017年6月14日) を参照。
- 2) 前掲 1) 日本政府観光局 (JINTO) ホームページを参照。
- 3) 2017年6月現在,アメリカのトランプ政権樹立を受けてユーロや米ドルに比べて円安が進んでおり,外国人観光客の訪

日促進にとっては絶好の機会であろう。

- 4) 『藤沢市観光振興計画』(計画期間 2011 ~ 2022 年度) の「見直し」(2014年4月)(藤沢市ホームページ (<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kankou/kyoiku/leisure/kanko/shinkokeikakuminaoshigo.html>)) (最終閲覧日:2017年6月15日)) を参照。
- 5) 前掲 4) を参照。それによると,藤沢市における年間外国人観光客数は 2013 年時点で約 36 万人である。
- 6) 1959 年 3 月 5 日に藤沢市はアメリカのマيامビーチ市と姉妹都市提携を結んでいる(藤沢市ホームページ (<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>)) (最終閲覧日:2017年6月16日) の「姉妹友好都市」を参照)。
- 7) 前掲 6) 藤沢市ホームページの「平成 28 年の海水浴客数について」を参照。
- 8) 公益財団法人・藤沢市観光協会ホームページ (<http://www.fujisawa-kanko.jp/>) (最終閲覧日:2017年6月16日) を参照。
- 9) 江島神社ホームページ (<http://enoshimajinja.or.jp/>) (最終閲覧日:2017年6月16日) を参照。
- 10) 前掲 8) を参照。
- 11) 前掲 4) を参照
- 12) 観光庁「訪日外国人消費動向調査—平成 29 年 1-3 月期の調査結果(速報)」(<http://www.mlit.go.jp/common/001182029.pdf>) (最終閲覧日:2017年7月16日) を参照。

文 献

- 有馬貴之・大谷 徳・安藤康也・青木美岬・赤津莉奈・浅川 翠・新谷明大・川端南実希・北澤美千絵・栗本実咲・小林竜大・佐野 湧・畠山里美・早崎由紀・菊地俊夫・湯舟佑樹・寺田悠希 2014. 箱根湯本における外国人観光客の土産物購買行動と土産物店・宿泊施設のサービス・コミュニケーションの状況. 観光科学研究 7: 45-52.
- 小土井元規 2013. 勾配知覚論—江の島における地域・観光の活性化計画—. 法政大学大学院デザイン工学研究科紀要 2
- 貞清栄子 2008. 観光立国へ向けて—訪日外国人旅行者の現状と課題—. 中央三井トラスト・ホールディングス調査レポート 64: 17-25.
- 鈴木 勝 2008. 世界観光競争力ランキングと観光立国日本—日本のポジション 25 位の検証を通して—. 大阪観光大学紀要 8: 25-32.
- 中岡裕章 2012. 江の島における日帰り観光の実態. 地理誌叢 53-2: 20-30.
- 松田時彦・松浦律子・水本匡起・田力正好 2015. 神奈川県江の島の離水波食棚と 1703 年元禄関東地震時の隆起量. 地学雑誌 124-4: 657-664.
- 森 悟朗 2007. 観光地としての江の島の展開. 宗教研究 80:

960-961.

森 悟朗 2009. 観光の地域づくりと宗教文化資源－神奈川県江の島の事例から－. 宗教研究 82 : 983-985.

若林芳樹 2002. トルコの海浜リゾート地・アンタリヤにおける外国人観光客の行動パターン. 金沢大学文学部地理学報告 10 : 147-158.